

まちの駅から活気

小売店などを住民や観光客に休憩場所として開放し、観光情報などを発信する「まちの駅」。県内にあるまちの駅の経営者らによる初の交流会が、那須町の「ゆめプラザ・那須」で開かれた。写真。

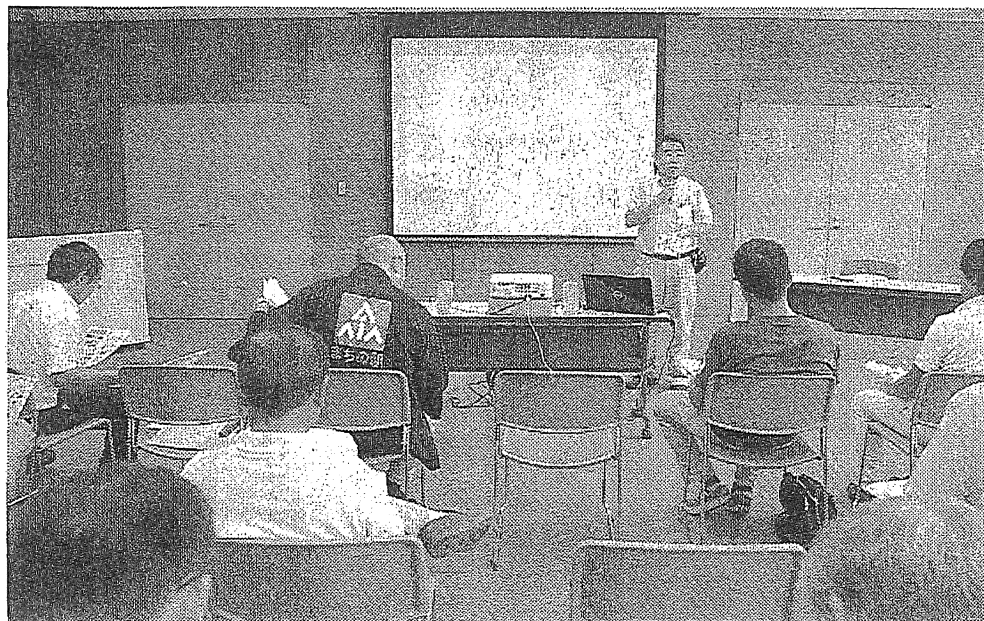
まちの駅は、小売店などに休憩、案内、交流などの機能を持たせたもの。NPO法人「地域交流センター」(東京)が、主に自治体が設置者の「道の駅」に対抗して提唱した。県内では鹿沼市、小山市、佐野市、那珂

川町などに全国最多の約1800店がある。交流会には約30人が出席。石川県観光マイスターの辻貴弘さん(51)が、全国のまちの駅の事例などを紹介した後、参加者が各地域や店の取り組みについて話し合った。那須町の「天然味噌の駅」駅長で、15店が加盟する「那須のへそ 黒田原まちの駅」世話人の江部芳明さん(56)は、「異業種のまちの駅が連携して、商店街に活気を取り戻していきたい」と話していた。次回交流会は小山市で開く。

資源生かし連携訴え

県内まちの駅が交流会

那須



まちの駅の今後の可能性を協議した交流会

【那須】県内まちの駅の連携と活動促進に向けた交流会「オールとちぎ交流会」がこのほど、ゆめプラザ・那須で開かれた。県内約190軒のまちの駅関係者のうち約40人が参加し、講演会や分科会を通し今後のまちの駅の可能性を探った。

毎年開かれるまちの駅の全国大会を契機に横の連携を深めようと、黒田原まちの駅や町商工会などがコーディネートした。前半は石川県白山市のまちの駅いっぷく処おはぎ屋の駅長で同県観光マイスターの辻貴弘さん(51)が講話した。

おはぎとソフトクリームを組み合わせたヒット商品を開発した辻さんは、自身の経験を踏まえ「既存の資源を一流に育てるのは人の役割。各まちの駅が連携し、自然、歴史、産物、食、景観といった資源を生かしスクラムを組むことが大切」と助言。「商売をしているのは自分たち自身。自分のまちが一番という気概を持ってほしい」と訴えた。

後半は、複数の班に分かれ「とちぎのまちの駅のつながり方」とのテーマで分科会を開いた。